

研究論文

ニワトリ飼育が乳児の 「いただきます」「ごちそうさま」の気付きに及ぼす影響

創価大学教育学部 児童教育学科
高橋 健司

要 約

食育基本法の制定により、乳幼児期・児童期における食育指導は広まりをみせている。その中で、乳幼児は食前後の「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶を家庭の躰として受けてきているが、保育所側の生き物の命を感じられるための食育指導としては不十分であった。

そこで、保育所におけるエスノグラフィー（ニワトリが卵を産む実際を園児自身が知り、調理して食すまでの取り組みを参与観察）により、命あるものを実際に飼育・食すという食育指導の教育的効果と現代社会に求められる食育指導について考察した。その結果、乳児は感情豊かに生き物と関わることができ、その命の有難みから「いただきます」「ごちそうさま」を体感しながら気付くことができた。また、ニワトリを中心とした乳児同士の関わりによる育ちあい場面や、保育者と保護者が共に乳児の成長に感動し、喜び合える場面が創出されるといった「副次的な教育効果」があることも明らかとなった。ニワトリ飼育の実践から、乳児の「いただきます」「ごちそうさま」の気付きを関連付けたことは、現代社会に求められる重要な食育指導の一端であることが示唆された。

I. 問題と目的

近年、食を取り巻く様々な問題として「食」を大切に作る心の欠如や栄養バランスの偏った食事、不規則な食事の増加、肥満や生活習慣病の増加、過度の瘦身思考、安全上の問題の発生、食物の海外への依存、伝統ある食文化の喪失などが挙げられる。このような状況を踏まえ、2005年（平成17年）に食育基本法¹⁾が成立した。この法律の目的は、すべての国民が「心身の健康を確保」し、生涯にわたっていきいきと暮らすことができるようにすること、さまざまな経験を通じて「食」に関する知識と「食」

キーワード：食育 SDGs エスノグラフィー ニワトリ飼育 乳幼児 命の有難み

を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることが挙げられる。特に、乳幼児・児童を対象とした食育については重点が置かれている。一般的に、人間の健康を司る「食事」は、生命の維持と健康な発育のために不可欠な栄養を摂取する行動をいう。特に、乳幼児にとって食べるとは、「運動」・「休息」と共に心身の成長を促す大切な基本的な生活習慣であり、食事の質と心身の健康との関係は深い。

国は乳幼児の食事を取り巻く背景を鑑み、「保育所における食育に関する指針」²⁾や2008年に改定された「保育所保育指針」³⁾と「幼稚園教育要領」⁴⁾では、乳幼児の発達の変化や社会に対応した改善策として、食育の重要性及び保育現場への食育の導入方法について記載された。

具体的には、「保育所における食育に関する指針」では、食育の5項目を以下のよう示しており、具体的な内容も示されている。

- ① 食と健康：健康な心と体を育て、自らが健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
- ② 食と人間関係：食を通じて、他の人々と親しみ支え合うために、自立心を育て、人と関わる力を養う
- ③ 食と文化：食を通じて、人々が築き、継承してきた様々な文化を理解し、つくり出す力を養う。
- ④ いのちの育ちと食：食を通じて、自らも含めすべてのいのちを大切にすることを養う。
- ⑤ 料理と食：食を通じて、素材に目を向け、素材にかかわり、素材を調理することに関心を持つ力を養う。

また、「幼稚園教育要領」の「第2章 ねらい及び内容」では、「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。」と記載されている。

これらを踏まえ、保育現場においては食育の活動を充実させていくことが望ましいと記されている。伊藤ら(2019)⁵⁾の報告には、3歳未満児を対象とする小規模保育所において、食育プログラムの一助として、調理体験を主とした効果的な「食育プログラム」を確立することを目的とした取り組みが紹介されている。一方で、森ら(2016)⁶⁾は、「子どもには食について、栄養や生活習慣の側面から理解を促すだけでなく、食べるということそのものの意味、つまり食べることは文字通り他の生き物の命をいただくということや、さらに栽培や流通など多くの過程を経て食を得ることができるということへの理解など、さらなる育みが求められているといえる」と幼児期における食育の課題を指摘している。

現在、「持続可能な開発目標（SDGs）」⁷⁾を推進する活動が盛んに行われているが、教育分野においても、食と暮らしと学びを総合的に実践する食育活動を展開するSDGsへの取り組み⁸⁾が広がりつつあり、今後、乳幼児期の保育においても、SDGsを意識した食育指導が具体的に展開されることが望まれている。本研究では、乳幼児期の食育指導における挨拶に着目する。ここで対象を乳児にするのは、乳児期における食育指導は幼児期の食に関する様々な基礎を育むからである。また、食前後の挨拶は乳幼児期の躰として重要であるとされながらも、「いただきます・ごちそうさま」という挨拶の本来の意味を、生命を感じる体験をもとにして指導する実践研究はこれまでに行われていないことが問題である。

食育に代表される「いただきます」という食前の挨拶は、日本人であれば一般的に家庭でも教育機関でも浸透し、躰として身につけているものである。広辞苑⁹⁾によると「いただきます」の意味は、「出された料理を食べ始めるときの挨拶の言葉。」とあり、一般的に敬意を表する言葉であり、肉や魚、野菜も含め、食材全ての「命」そのものに向けた感謝の言葉とされている。また、食材を育てたり獲ったりした人、食事を作ってくれた人に対する感謝の気持ちを込めた言葉ともされている。一方で、食後の挨拶である「ごちそうさま」は「御馳走になったのを感謝する意の挨拶語。日常の食後の挨拶にも使う。」とあり、昔に比べ、食材を調達・調理することが便利になった現代においても、食事には、食材を育て収穫する人や運搬する人、販売する人、調理盛り付けする人など、多くの人が携わっており、そのような人々の働きに感謝を表して使う言葉として使用されている。

古郡ら（2009）¹⁰⁾の研究においては、学生を対象とした質問紙調査の中で、「通園先での思い出に残っているもの」として、食生活に関する援助や教育的指導を受けたことへの思い出の質問16項目中、「いただきます・ごちそうさま」の挨拶をした回答が最も多かった（74.5%）ことを報告している。また、幼児期における家庭の食事の躰の記憶に関する全9項目中、「いただきます・ごちそうさま」のあいさつ（74.0%）、箸の持ち方（71.0%）、好き嫌いをしないこと（51.9%）、食事中に立って歩かないこと（51.0%）が上位であったことを報告している。

つまり、「いただきます」「ごちそうさま」は家庭を含め幼稚園や保育所においても、日常的に大切にされてきた挨拶であり、素材の命や料理を作ってくれた方々への感謝を伝える言葉として、教育的に躰・指導されているといえる。

この「いただきます・ごちそうさま」の挨拶の気付きを乳児に引き起こさせるためには、保育者が与えるべき活動の内容を精選する必要がある。まず、食育活動の実態として、生川ら（2018）¹¹⁾の研究によれば、最も多く取り組まれていた食育内容は「ミニ菜園・栽培」であり、93.9%と大半の施設で実施されていたことを報告している。また、「食事・おやつを食べ方の指導（76.6%）」、「絵本・紙芝居・お話・劇等（74.5%）」、「食事のマナー（68.9%）」、「調理体験（63.5%）」、「遠足・見学・収穫体験

(58.6%)」の項目は半数以上の施設で取り組まれている状況から、各施設で取り組まれている食育活動はこの6項目に集約されている。しかし、「飼育」は14.0%と実施率は低い実態であった。

「飼育」の実施率が低い要因には、次のことが考えられる。伊藤ら(2016)¹²⁾の研究によれば、保育者は動物を飼育する際に、「生物教育上の利点」よりも「飼育・入手のしやすさ」を優先していることが明らかにされている。また、「自然科学的」な学びよりも「観察のしやすさ」や「飼育のしやすさ」を重視している。さらに、飼育している生き物は「カブトムシ」・「ザリガニ」・「カタツムリ」・「オタマジャクシ」・「キンギョ」・「ウサギ」・「メダカ」・「カメ」が挙げられており、食に繋がる生き物の項目は皆無である。このように、食前後の挨拶は乳幼児期の躰として重要であるとされながらも、「いただきます・ごちそうさま」という挨拶の本来の意味を、生命を感じる体験をもとにして指導する実践研究はこれまでに行われていないのが現実である。

以上、本研究は、保育所における参与観察により、乳幼児が命あるものを実際に飼育・食すという食育指導が「いただきます・ごちそうさま」の挨拶の気付きに及ぼす影響と現代社会に求められる食育指導について考察する。

Ⅱ. A保育所におけるエスノグラフィー

1. 研究方法

本研究では、①「乳幼児の食育活動（ニワトリの産卵の実際を知り、調理して食すまで）を参与観察した乳児の姿」、および②「保育者の保育日誌における職員が捉えた乳児の姿」に対し、考察を行う。

研究手法は現場に身を置く（参与観察）ことで、当事者の姿を描き出し、問題を生成し、考察する手法である「エスノグラフィー」とする。参与観察した内容は、フィールドノートに記録する。

エスノグラフィーとは、1920年代に文化人類学で開発された質的研究法で、1980年代以降、心理学の研究法としても導入されるようになった。今日、発達心理学・保育学・乳幼児教育学など、子どもを対象とするさまざまな学問領域でも関心が高まり、子ども研究の手法として注目されている。また、子どもを対象としたエスノグラフィーの手法は、柴山(2006)¹³⁾は「参与観察・インタビュー・調査法・テスト法・文献収集などの複数の技法を多角的に使って、子どもの言動を徹視的かつ包括的に見て記録するための手法」であり、「参与観察をはじめとする複数の技法を使って、子どもの自然の営みを子どもが生きる生活環境から切り離さないようにしてデータ化する」ことが特徴であると述べている。

さらに、藤田(2014)¹⁴⁾は「調査方法論としてのエスノグラフィーは、参与観察(participant observation)を基本としている。参与観察とは、調査者が研究テーマに

関わるフィールドに自ら入って、人々の生活や活動に参加し、観察を行う調査法である」とし、「エスノグラフィーとは調査方法論であり、そのプロセス（過程）とプロダクト（成果）の両方を指す」と述べている。さらに、岩田（2011）¹⁵⁾は「保育者の意図性と、その意図の表現（保育者のふるまいを含めた環境構成）、それに応答する子ども集団の状況（「遊び」の展開のされ方、他の「遊び」との関連）とその集積が記述され解釈されることによって初めて、保育実践を十全に捉えうるものであり、それが保育実践をフィールドとするエスノグラフィーなのだ」という。つまり、保育とは子どもだけでなく、子どもと保育者が相互に織りなす営みのことであるゆえに、そのそれぞれの姿を解釈する必要があるといえる。

本研究において、食育活動の実際と課題を明らかにするためには、実践の当事者の視点で捉えることを重視し、観察は子ども及び保育者と共に動いた保育体験を前提として、エスノグラフィックな実践研究することが望ましいと考えられたため、この手法を用いた。

2. 調査期間

平成30年12月～令和元年8月の9ヶ月間を調査対象期間とした。

観察頻度は週に1～2日程度である。

3. 保育所の概要

首都圏B市にある筆者が勤務するA保育所は、ニワトリ飼育による食育活動をベースにしてSDGsを推進しており、「①給食の残飯をドライ化し餌利用」、「②園周辺の雑草を摘み取り、餌とする」、「③鶏糞・卵の殻・落ち葉を堆肥化し、畑に利用」といった循環型（再利用）の保育を試みている。

年齢構成は0歳児3名、1歳児5名、2歳児4名在籍の小規模園である。

A保育所は首都圏郊外に位置することから、自然環境に恵まれており、園庭には、数種類の苗が植えられる花壇を有し、夏野菜等の栽培にも力を入れている。また、世界各国の食事を給食のメニューに取り入れ、食文化を通じて世界を意識し感じる保育を行っている。これは子どもを健全に育成するためには、心身の基盤である「食」を充実させるという保育・教育理念が背景にある。0歳から「食」の大切さや楽しさを知り、3歳までに人格の土台が作られていく大切な時期であるからこそ、様々な取り組みに挑戦し、五感に訴える食育を進めている。また、保育室から調理の様子が見えるようになっており、調理担当者と共に季節に応じたクッキングを楽しむ取り組みも積極的に行っている。（図1）



図1 食育活動の一例（左：ほうれん草の収穫、中央：梅ジュース作り、右：味噌づくり）

4. 倫理的配慮

A 保育所全保護者に対し、説明文書を書面で配布し、丁寧に研究内容の説明をした上で、研究参加に対する同意の署名を得ている。

また、本研究は創価大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の研究倫理審査において承認を得ているものである。

Ⅲ. 結果と考察

職員の理解と意思の共有化

まず、ニワトリを飼育するにあたっては職員の理解なくしては始まらない。筆者は職員会議にてニワトリの飼育する目的を伝え、理解を図った。職員には大きな驚きがあった。というのも、小さな保育園で、生き物を飼い始めるということ自体に少しばかりの抵抗があったようで、しかもニワトリ（烏骨鶏）ということで驚きを隠せていなかった。中には動物の中でも「鳥類」が特に苦手な職員もいた。しかし、あくまでも子ども達の教育を目的としたねらいがあり、保育者が生き物に対しての苦手意識を前面に出して保育していけば、子どもにも同じく苦手意識を持たせてしまうため、丁寧な理解を図るように心がけた。一人の職員が勝手に行う保育ではなく、ここでニワトリを育てることへの理解と意思の共有化を図ることで、職員全員が関わる意識を持つことができた。ひいてはその意識が子ども・保護者を含めた保育所に関わる「みんな」で育てる意識へ昇華していく元となった。

導入としての子どもたちとの小屋作り

ニワトリを飼うに当たり、子ども達に興味・関心を持たせるために、導入として小屋のハンドメイドに着手した。筆者の勤務する保育所には0歳児～2歳児までの子どもが遊ぶには十分な園庭があり、筆者は日々の業務・保育の傍ら時間を少しずつ取り、園庭の片隅に小屋の建設を始めた。2×4材を主材料とした小屋作りでは、メジャーを使って長さを測り、ノコギリで切断していく。また、電動ドライバーで音を立てながらネジを打ち込んでいった。子ども達はその作業一つ一つに興味を示し、「せ

んせい、なにしているの？」と聞かれるようになる。「にわとりさんのお家を作っているよ」と答えると、「へえ、ニワトリさん、ほいくえんにくるの？」と徐々に関心を高めていった。小屋の基礎となる土台ができると、上に乗り、踊ったり歌いだしたりした。

また、保護者に対しても、「先生、何を作られているのですか？」と質問されることがあり、「ニワトリを飼育するために小屋を作っています」と返答すると、「いいですね、生き物を飼うことで情操教育にもなりますからね」と、賛同する声も聞くことができた。昨今の鳥インフルエンザのニュースなどを見ている保護者には一定の警戒心があることは予想できた。まだまだ小さい子ども達に、ニワトリを飼うことが「必要な教育」かどうかを理解して頂くには、安全管理の面で徹底していることや、命の大切さを教育していこうとする保育者の情熱を伝える必要があった。それを推し進めたのが小屋の手作りであった。帰りのお迎えのちょっとした時間に作業していると会話が生まれ、その会話の中で徐々に理解が進められたと感じる。おそらく、心の準備も理解もなく突然にニワトリがやってきたら、子ども達も職員も保護者も間違いなくアレルギー反応を示していたことが予想される。

また、小屋のデザインも農家の掘っ立て小屋のようなものではなく、「可愛い」と思えるデザインが親しまれると考え、ログカントリー風にした。いわゆる小屋が「絵」になることも、ニワトリに親しみを持つためには大事なことであった。また、最終段階の扉の作成では、園児に色塗りをしてもらった。自分たちが作ったとなれば、さらに興味関心を持つことが考えられたためである。およそ4ヶ月の工期で小屋が完成した。(図2)



図2 小屋建築の様子

- 左：興味津々に建築作業を観察する子どもたち
- 中央：脚立やあらゆる工具に関心を持ち、時には遊び場にもなっていた
- 右：自分で色塗りして完成したニワトリ小屋に愛着をもつ

また、日々の関わりの中で子どもたちの興味関心を高めるために、保育所にある絵本や音楽などで導入をしていった。ニワトリや卵についての内容の絵本は全くないわ

けではなく、日常の中で絵本を通して、その存在を知り得ることができていた。(図3)



図3：ニワトリやたまごに関わる内容の絵本等の一例

ニワトリを迎える

保育者が全保護者宛に配信している連絡帳 SNS アプリケーション内に記述している内容を抜粋し、具体的な子どもの姿を考察する。

本日夕方、とうとう「東京うこっけい」が**つばさ**保育所にやってきました！冬の寒い時期から、園長先生が鶏小屋を作成。その様子を見て、お子様たちも「とりさん、くるんだって！」と心待ちにしていました。 予定よりも1羽多い、5羽のうこっけいのヒナさんがやってきました。真っ白な羽で、スッと立つと30cmほどの背丈に届きそうなくらいです。お子様たちは、興味津々、でもちよっぴりコワイ…、でも触ってみたい…！キャーキャー！と、賑やかな反応でした。手作りの新しいお家、気に入ってくれるといいな、と思います。送迎の際に、ぜひ鶏小屋を覗いてみてくださいね。7月ごろには、最初の卵を産んでくれる予定です。どんな味かなあ、どんなお料理を作ろうかなあ…と楽しみです！
(5/10)

下線は子どもの行動及び様子を表した記述に対し、筆者加筆

考察：

ニワトリの品種は「東京うこっけい」という品種である。品種改良を経て、1羽当たり年間180個ほど卵を産むという。改良以前の烏骨鶏の産む卵の数の2～3倍ほどのことであった。入手先は東京都青梅市にある東京都農林水産振興財団の「青梅畜産センター」である。養鶏家へ有償配付をしているが、研究機関や教育機関へは無償で提供してくださるということで、公文書のやり取りを経て「教育目的」で5羽無償譲渡していただいた。

保護者には連絡帳 SNS アプリケーションにて周知した。また畜産センターからの公文書をそのまま掲載することで理解を得られるよう、配慮した。

初めて保育所に迎える当日は、畜産センターに直接引き取りに行った。ゲージを用意して5羽受け取った。事前のやり取りがあったため、引き取りに要した時間は5分

程度であった。保育所に迎えた時間は午睡の時間であったため、園庭にゲージに入れた状態で待機し、午睡明けの子どもから順番に初対面を迎えた。初めての出会いに少しばかり緊張した面持ちで近づく。目を大きく見開いて、「にわとりさんだ！」と喜びを爆発させていた。次第に慣れ始め、徐々に勇気が上回り、そっとニワトリの背中に触れていた。(図4)



図4 左：午睡明けにゲージ内のニワトリとご対面 右：手を伸ばし興味を示す園児たち

日々の関わり

子どもが飼育に関わる内容は、主に「餌と水をあげること」と「卵の収穫」の2つである。

以下、保育者が連絡帳 SNS アプリケーションに記述している内容をもとに、具体的な子どもの姿を考察する。

～烏骨鶏と戯れる日～ 烏骨鶏がやってきて、まもなく1週間が経ちます。日に日に立ち姿が大きくなってきて、羽をバタバタさせてジャンプすると、存在感がありますね。久しぶりにお庭に烏骨鶏を放し、「仲良しになれるかな…？」とお子様達も、烏骨鶏達も、様子を見ながら近づいています。羽や尻尾や背中をそっと触って、「かわいいね」と微笑んでいました。(5/16)

小さいお友達は小さいプールで、水しぶきをあげながらお魚さんのオモチャや水鉄砲を手に取ってニコニコ遊んでいました。プールの休憩時間には、美味しい自家製フルーツアイスを食べたり烏骨鶏の餌やりに挑戦！！お子様達もすっかり烏骨鶏にも慣れて、上手に餌をあげてくれました。(6/25)

保育所に戻ると、とっても嬉しそうな表情の園長先生がお出迎えです。きてきてー！の声にみんなで鶏小屋に集まってみると……なんと！烏骨鶏の第一号となる卵が生まれていました！「触ってみたい！ちょーだい！」お子様も職員も、初めての卵に大感動！目をキラキラ輝かせて、そっと手においてみました。可愛らしいサイズの卵でしたが貴重さをずっしりと感じ、みんなで初めてを味わえた素敵なひと時となりました。(7/8)

「え！今日も産んでる？」「うん！先生ーたまごあったよー！！」と朝の会話です！！ そうなのです！ 今日烏骨鶏さんがたまごを産んでいました！！ 3つ目の卵。そのやりとりを聞いているお子様も お庭に出てきて小屋を覗く姿もありました！ (7/10)

お散歩に行こうとお庭に出てみると、今日もまた烏骨鶏が2個卵を産んでいました。お子様達も大喜びです！両手で優しく包み込む様に卵を持ってみると「なんか卵あったかいね?!」「小さくて可愛い卵だね?!」とお子様達の会話も弾んでいました。(7/11)

そして、今日は烏骨鶏の産みだての卵を割ってみんなで観察をしました。烏骨鶏との距離が深まり抱っこも出来る様になったお子さまもいます。3時のおやつに、みんなで少しずつ烏骨鶏の卵焼きを頂きました。「あまい?」「おいしい?」と大好評でした。(7/12)

そして…烏骨鶏が今朝は3個卵を産み、みんなで食べられる数になったので、目玉焼きを焼いて食べることにしました。ミニミニサイズのハムエッグは、お子様の小さなお口にぴったり。パクッと頬張ると、「おいしい!」「とりさん、ありがとう!」と生命の恵みに感謝しながらいただきました。(7/25)

休憩時間には、毎日恒例になっている烏骨鶏の卵チェックと餌やりです。烏骨鶏とすっかり仲良しになったお子様達は、餌やりもとっても上手になり順番を守ってみんなで餌をあげることができました！(7/29)

今日も烏骨鶏の卵が3個産まれました。毎日卵を産んでくれる烏骨鶏さんたち、お子様も卵の収穫に慣れて小さなおてでふわっと握ります。あたたかみのある卵にありがとうを感じる日々です。(7/31)

台風が近づいて、今日も雨が降ったり、青空が見えたりと変化の大きい1日でした。晴れ間にはガーデンラボで烏骨鶏のお世話をしたり、水風船で遊んだりしました。烏骨鶏も毎日ラボをお散歩するのが日課になっているので、晴れ間は嬉しいようで、ココッ、ココッと鳴きながらお子様の間を歩いています。今日は卵を4個も産んでくれ、感謝です！(8/15)

線は子どもの行動及び様子を表した記述に対し、筆者加筆

考察：

ニワトリの存在も日を追うごとに日常の中に溶け込んでいった。

勇気が出る子は積極的にニワトリに触れていた。抱っこに挑戦できる子は1人おり、その子が抱っこできると、他の子も自分もきつとできるという気持ちになるのか、2人、3人と挑戦の意欲を示すようになった。(模倣・育ちあいの姿)

特に子どもたちは餌やりをしたがった。配合飼料をスコップにすくい、箱の中に入れる。一人で何度もやれば与えすぎになるので、1人1日1回までとし、順番を守って、自分が終えたら次のお友達に代わってあげようと声掛けをした。(順番を守る気持ちの育み)

そして卵が産まれると、収穫の楽しみが出てくるようになった。

初めての産卵はタイミングが予測できないため、突然のことで発見したときは子どもも職員も大喜びであった。(卵がニワトリから本当に産まれてくるという発見)

その後は、日々3～5つずつ産まれ、子どもは順番に収穫体験をした。緊張した面

持ちで小屋に入っていく、手に卵をもって出てきたときは、とても嬉しそうな姿であった。また、卵を割り、黄身と白身が見える状態をしばらく観察した。卵を割れば黄身が出てくるといった一見当たり前のことも、その時は当たり前でなく、不思議さも含んだ感動がそこにはあった。これこそが知識では得られない体験のもつ感動であるといえよう。また、収穫した卵を途中で下に落としてしまうこともあった。割れた卵から黄身の姿が見える。また呆然とそれを見つめる子どもの姿があった。卵の殻は固いが、落とすと割れてしまうという体験も、飼育活動ならではの体験である。(体験することで得る学び)

そしてその姿を写真に収め、保護者へお伝えするなかで、子ども自身が飼育活動を通して何かを学び、成長する姿に、保育者と保護者が共に子どもの成長に感動し喜び合える場面も多くあった。(喜びの共有)

卵の数が揃ってくると、ハム入りの目玉焼き作りをした。職員がホットプレートに卵を割り、焼いた。あえて卵らしい形をイメージしやすいように、卵焼きではなく目玉焼きにした。その日の朝に収穫した新鮮な卵は黄身の丸みが球体に近く、産卵から時間の経った卵はつぶれていた。食前に、「いただきます」とはその命をいただくことであると話をし、これから食べる卵が命に代わる存在であることを話した。自分たちで収穫した卵の味は、皆が口をそろえて「いただきます!」「おいしい!」と言い、ひととき喜びを表した姿であった。そして、食後にはニワトリが産むことで得られた卵を食べられることへの感謝の思いを意味した「ごちそうさま」について触れ、その意味を踏まえ子どもたちは「ごちそうさまでした!」と元気に挨拶をしていた。(命の恵みに感謝・「いただきます」と「ごちそうさま」の気付き)



IV. まとめと今後の課題

本研究はA保育所をフィールドとしたニワトリ飼育のエスノグラフィーにより、現代の幼児教育・保育の場に求められる食育指導の在り方を探ってきた。結果として、子どもたちは感情豊かに生き物と関わることができ、卵の収穫とクッキング活動を通して、その命の有難みから「いただきます」「ごちそうさま」を体感・気付くことができたであろう。

それだけでなく、ニワトリを中心とした乳児同士の関わりや育ちあい場面があったことや、保育者と保護者が共に子どもの成長に感動し喜び合える場面が創出されるといった「副次的な教育効果」があることも明らかとなった。

現代の保育環境にあっては、食育に繋がる生き物の飼育は難しいかもしれないが、「いただきます」「ごちそうさま」の気付きと結び付けたニワトリ飼育の実践の意義は、SDGsを推進する現代社会に求められる重要な食育指導の一端であることを示唆しているといえよう。

今後の課題としては、卵を孵化させ、ヒヨコからニワトリになる姿までの展開は未だ行っていないため、卵に命が宿っていることを乳児がイメージできているとはまだ言い切れないことである（実際は生まれてくる全ての卵が無精卵のため、命そのものが宿っているとは言い難い）。今後はオスのニワトリを飼い、有精卵から孵化し、ヒヨコになる姿を通して命のつながりを体験させていきたいと考える。また、さらなる「いただきます」の発見につなげるべく、その先の「成鶏の鶏肉を食べること」まで実践し、検証していくことを今後の課題とする。

また、保育実践研究におけるエスノグラフィーの方法論として、本研究では勤務園にて保育場を保育の連続性を捉えながらリサーチすることができたが、関係者以外の研究者が同じような捉え方をすることは、中・長期的に連続して保育に入ることができない点から、非常に困難であるのが課題であろう。その意味では、実践者向けの質的研究方法である。今後は保育所におけるエスノグラフィーを使った研究の可能性を狭めないために、関係者以外の研究者はその立ち位置をどのような位置に置くか、また、その立ち位置に立つまでのプロセスについても検討していく必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) 内閣府 食育基本法 (2005)
- 2) 厚生労働省：楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～(2004)
- 3) 厚生労働省 保育所保育指針 (2017)
- 4) 文部科学省 幼稚園教育要領 (2017)

- 5) 伊藤知子・小野早苗・倉園安子「1～2歳児を対象とした小規模保育園における食育の取組み」帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要第4号 pp. 29～38 (2019)
- 6) 森美佐紀、平工志穂「幼児期における食育の現状と課題」東京女子大学紀要論集 67 pp. 243～254 (2016)
- 7) 外務省「持続可能な開発目標」(SDGs)について https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/about_sdgs_summary.pdf
- 8) 朝日新聞デジタル 2030 SDGs で変える「日々の営みにこそ、学びがある。自由学園の「すごさ」とは」(2018/7/17)
<https://miraimedia.asahi.com/jiyuu-gakuen/>
- 9) 広辞苑(第6版)(2008) 岩波書店
- 10) 古郡曜子、菊地和美「保育所・幼稚園における食の思い出調査:家庭でのしつけどの関連をふまえて」日本調理科学会誌42(6) pp. 410-416 (2009)
- 11) 生川美江、磯部由香、鈴木理可、加藤静香、平島円、吉本敏子、西村訓弘「三重県内保育所・幼稚園における食育の実態」三重大学教育学部研究紀要(教育科学) 69 pp. 229～234 (2018)
- 12) 伊藤哲章、小林みゆき「動物飼育における保育者の認識に関する研究」日本科学教育学会研究会研究報告 vol. 30 no. 6 pp. 75-78 (2016)
- 13) 柴山真琴「子どもエスノグラフィー入門」新曜社(2006)
- 14) 藤田結子・北村文 編「現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践」新曜社(2014)
- 15) 岩田遵子「保育実践をフィールドとするエスノグラフィーとは何か」子ども社会研究 17号 pp. 127-141 (2011)

title

Chicken breeding is for infants
Influence on awareness of “Itadakimasu” “Gochiso-sama”

Kenji TAKAHASHI
(Faculty of Education, Soka University)

summary

Although education for young children in healthy eating has become widespread after enactment of the Basic Law of *Shokuiku* (Dietary Education), customary Japanese expressions of gratitude before and after a meal (*Itadakimasu* and

Gochiso-sama) have become mere habit and are inadequate in fostering awareness that living creatures lose their lives to provide sustenance for human beings. Therefore, at the author's employer, T Daycare Center, an ethnography study was conducted to examine the educational effectiveness of dietary education that incorporates the process of actually raising living creatures (participant observation in which the children themselves learn that chickens actually lay eggs, and that people gather, cook, and eat the eggs), as well as to consider the question of what kind of dietary guidance is needed in a modern society.

It was found that the children related to living creatures in an emotional manner, and realized the implications of Itadakimasu and Gochiso-sama as a heartfelt appreciation of life. There were also “secondary educational effects,” namely, that an educational setting was created in which the children learned interactively by focusing on the chickens, and both childcare workers and guardians were impressed and delighted by the children's maturation. These findings suggest that a significant awareness of Itadakimasu and Gochiso-sama in direct association with raising chickens for food can be an important part of the dietary educational guidance needed in a modern society.

Keywords: *Shokuiku* (Dietary Education), SDGs, Ethnography, raising chickens, infants, heartfelt appreciation of life,